ph:Nakagawa Akira

ARICHI Soichi
ASAI Toshihiro
BEATE Weber
GUEN&PONCO
HAGE Taishin
ITO Rei
JITTANI Aoi
Kaeru
KAZUMI Maeda
KINOSHITA Masayuki
M.Shino
NAKABAYASHI Hisakazu
NAKAGAWA Akira
NAKAI Takako
NII Reiko
OKUMURA Yasuhiko
RICHARD Harrison
SASAOKA Takashi
SHAKUNAGA Michiyo
SHIBATA Yuri
SHINBORI Hiroichi
SOGAWA
TANABE Haruko
TANAKA Fuji
UESAKA Kazuyo
WATANABE Ryoko
YAGI Hiromasa
YAMAMOTO Kaori

data:M.Shino

Recordable Millennium

December 4,1999-December 22,1999

Recordable Millennium

田尾弘一 / Cohichi TAO

情報の歴史は不可逆な流れとして進む。写真、映画、有線・無線通信、録音といった様々なインフォメーションテクノロジーが開花した１９世紀末を受け、２０世紀末は情報のデジタル化と世界的なネットワークの普及により、情報の質量両面での爆発的な拡大が生じた。天国のない世界は想像できる。でも、想像してごらん、情報技術のない世界のことを。いまやメディアは有形無形のネットワークに接続され、休むことなく何かを記録し続けている。何を？　何のために？　素朴な問いかけでは制御することあたわぬ、自律的に働き続ける入出力。記録の反復／複製がそれによって自らを肯定し続ける、Recordable Millennium。

２０世紀末、すべては記録され、後の世に残される。五官に対する入力はほぼ全面的にデジタル・コンバージョンが可能となり、ある日の現象はすべてメモリチップ／記憶媒体の上のビットに展開される。ノイズは切り捨てられ、永遠にクリアなそれとして、昨日のことも千年前のことも等価になる時が、近づいている。

メディアの上に複写され、蓄積され続ける現実。あらゆる出来事は、写され、映され、撮され、移されていく。紙の上に、磁気記憶媒体の上に、光ディスクの上に、メモリの上に。人の記憶の価値は相対的に軽くなり続け、年寄りの語る言葉はもはや不確かな世迷い言だ。世界は複雑になりすぎて、語られる言葉をすべて裏付けることはもうできない。ぼくたちは決められた手順に従って転写された情報だけに、信頼を委譲し続ける。不幸にも転写されることをまぬがれた出来事だけが、誰も知らぬまま、消えていく。

自分自身が消えないように、今日も誰かが、誰かを、何かを、写している。写すことで、欲望を満たしてしまうから、ぼくらは写せば写すほど、何かを失っていく。そしてぼくらはついに、失うことをも失う。日々想像できないほどたくさんの何かを失ったとしても、今や記録されざる何かは存在することを許されないからだ。ありえざる喪失を回避するために、今日も誰かが、誰かを、何かを、写し続ける、Recordable Millennium。

さて、あらためてぼくは「私の２０世紀」の名の下に、ぼくの２０世紀について語ろうと思う。

1967.8.13 - 2000.12.31。墓碑銘のように語るならば、それがぼくの２０世紀だ。はじまりは変えようがなく、今のところ終わりはまださだかではない。

「私の２０世紀」の名の下に、ぼくは自らの２０世紀を再構成しようとする。そのとき、例えばぼくの２０世紀には、戦争も、革命も、災害も、流行病も、ない。それはぼくの２０世紀の話ではなく、どこかにいる誰かの２０世紀なのだろう。限られた時間の中で限られた場所に生きたぼくたちはみな異なる２０世紀を生きてきた。ぼくの２０世紀にあったのは、留年や、倒産や、失業や、ささやかな精神の病……。ぼくの２０世紀は常に、何らかの欠如とともに進んできた。

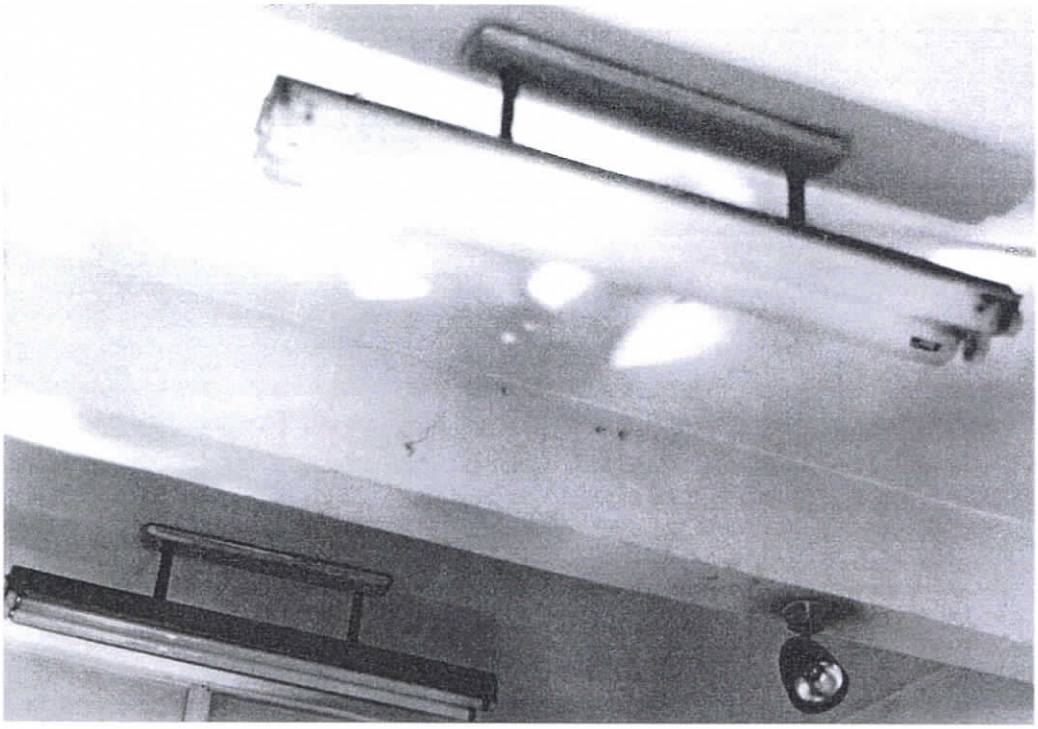
ぼくはぼくの２０世紀の半ば頃から、意識して手元に自分の姿が写っている写真を残さないようにしてきた。学生時代の折々のイベントで撮られたスナップショットはすべて捨ててしまい、卒業アルバムも手元にはない。作品として撮られた、何を撮りたかったのかもわからない日常を切り取った写真だけが引き出しの底に眠っている。元はといえばそれは幼いダンディズムとでもいうべきものの現れだった。ぼくは、過去も未来も持たない存在になりたかったのだ。その一方で、ぼくは自分の現実を自分の意志、自分の言葉以外のものにゆだねることに我慢できなかったのだと思う。

あるいはぼくはこれからも、「私の２０世紀」を、目に見える形で残さないだろう。それは、ささやかな、Recording Millenniumに対するプロテスト。リアルが写されているのではなく、写されたものだけがリアルになる時代に、ぼくは自分にとってのリアルなものを、自分自身で決めるために、それを積極的に捨てようと思う。かつてあった何かを、語ることによって、語るその意志において、その時点で組織すること。アリバイを持たずに、無実の証を立てること。自分自身の存在においてそれを保証することこそが、たぶんぼくにおける「私の２０世紀」のかたちなのだから。

そして1999年の終わりに、誰かのアリバイ、限られた時間、限られた場所で生きた者たちの、交差することのない存在証明でしかなかったさまざまな写真を、あえて「私の２０世紀」と名づけようとする行為は、ぼくにおける「私の２０世紀」とはさかさまのように見えながら、どこか遠いところで重なり合おうとしているのかもしれない。

「私の２０世紀」、この言葉の組み合わせがもたらす居心地の悪さをかみしめながら、それを自らが選び取ったわずかばかりの写真の上にかぶせるときの、さらなる居心地の悪さはどうだろう。それぞれことなる２０世紀から持ち込まれた写実のかけらは、結果的にそれぞれにおいて不実な代物を形作るはめになる。パブリックとプライベートの狭間で、統一された印象が陥没しつづけ、ありふれた＜もの＞たちからなるアートスペースが、得体の知れない時空間に変わる瞬間。他者という怪物の生まれる瞬間。同じ場所、同じ時代を生きた者たちの途方もない隔絶。

それでも、あるいはそれゆえに、ぼくたちは語るだろう。誰かのための、誰かの２０世紀の断片を、それぞれの２０世紀において引き受けるために。ありえざる瞬間を埋め、とほうもない隔絶を埋めるために。おそらく、「私の２０世紀」なる空間は、この不毛な行為を支える意志の果てにのみ広がる、不確かな何かだ。今ここにおいて語ろう。その瞬間だけは、間違いなくぼくらは、Recordable Millenniumの一歩前にいる。



NO,1 1964年（内科画廊個展）
田中不二
TANAKA Fuji

右でもなく　左でもなくヨーロッパへ（東ドイツ。知識人の夢）
ベアテ・ウェーバー　BEATE Weber

かえる　Kaeru

中井貴子　NAKAI Takako

Recordable Millennium

『私の20世紀』展

有地左右一、浅井俊裕、ベアテ・ウェーバー、ゲン&ポンコ
羽下大信、伊東伶、実谷あおい、かえる、ぴよ、木下雅之
シノバー、中林ヒサカズ、なかがわあきら、中井貴子
新居玲子、奥村泰彦、リチャード・ハリソン、笹岡敬
釈永道代、しばたゆり、しんぼりひろいち、寒川、田邊晴子
田中不二、上坂和代、わたなべりょうこ、八木宏昌、山本香

キュレーション：笹岡敬

1999年12月4日(土)～22日(水)

CAS
Contemporary Art and Spirits

540-0038大阪市中央区内淡路町2-1-7都住創内淡路602 MDart内CAS
2-1-7-602 Uchiawajimachi,Chuo-ku,Osaka,zip 540-0038,Japan
phone+81(0)6-6941-3237 fax+81(0)6-6945-4709
master@cup.com http://paper.cup.com/